科学と社会委員会 課題別審議等査読分科会（第２４期・第３回）議事要旨

１　日　時　令和２年９月１１日（金）　１２：００～１２：３０

２　場　所　（オンライン開催）

３　出席者　藤原　聖子（第一部会員・委員長）、小林　傳司（第一部会員・副委員長）、
小安　重夫（第二部会員・幹事）、遠藤 薫（第一部会員）、
松浦　純（連携会員・前第一部会員）、西村　いくこ（第二部会員）、
古谷　研（第二部会員）、高橋　桂子（第三部会員）、坪井　俊（第三部会員）、
藤井　良一（連携会員・前第三部会員）、渡辺　美代子（第三部会員・副会長）
（欠席）　中村　崇（第三部会員・副委員長）、平井　みどり（第二部会員・幹事）、
甲斐　知惠子（第二部会員）
（事務局）船坂企画課専門官

４　審議事項

主として第２５期への申し送り事項に関し、大要次のとおり審議を行った。

（１）第２４期における査読状況の総括
・　委員長より資料に基づき、今期（第２４期）の本分科会の査読実績についての説明があった。委員一人当たり、平均して２件の査読を担当したこと、また、前期、前々期実績との比較等について報告があった。

（２）第２５期への申し送りに関して
・　査読分科会と親委員会（科学と社会委員会）構成員が現在は大部分重複しているところ、親委員会のミッションが変容してきていること、また、幹事会構成員である委員は極めて多忙であることなどから、構成を区分した方がよいのではないか。
・　当該意見に賛同する。その方が査読分科会としてのミッションや活動が明確になる。
・　委員長の調整能力が大変重要。その点で今期は極めて円滑に分科会としての査読を了した。一方でこれが来期においても継続的に行えるか危惧される部分もあり、誰が委員長に就任しても今期と同様に指揮を行えるような仕組み・工夫、あるいは、委員長の仕事の本質を何らかの形で残すことが必要ではないか。
・　本分科会の委員に就いたことで、査読者、提言等の作成者双方の立場を理解する端緒となった。どこまで査読意見を付けるべきか。査読者が権力になっても困るし、逆に査読者としてこれは言ったほうが良いと考えた場合もある。そのような共通する理解を今後の本分科会の活動にどのように残せるか、考える必要がある。
・　査読対象と自分の専門分野との距離感といった点で査読を担当する際、悩ましいことがある。自分の専門分野に関する提言等であれば、極端な場合、提言の却下ということもあり得る。査読委員を増やして対応すればそのような隘路は解消されるが、多くの査読委員の意見を入れることで、別な煩雑さも生まれるだろう。
・　自分の専門分野ではない査読対象の場合、基本的な姿勢は、内部の論理的な整合性、専門分野外の人が理解可能か、という点が主眼となる。
・　分科会における、執筆体制（分担執筆）に起因して、章ごとにトーンががらりと変わることがある。分科会によっては、全体を整合的に修正頂いている場合もあるが、査読者としてどこまで修正を要求するべきか、悩ましい場合がある。
・　会員間で、提言と報告の相違についての認識が必ずしも共有されていない。報告は提言

よりも軽いものだ、といった認識を有する会員も少なからずいるように思われるがが、それは彼我の相違の本質ではない。

・　以上について、課題と考えられる事項については、第２５期への申し送りとして整理することとする。

以　上